ルネサンス・ヒューマニズムと近代
—— 特にイタリアとドイツの視点から ——

根 占 献 一

19世紀 — ルネサンスとリソルジメント

19世紀は、イタリア・ルネサンス時代を研究している者には、なんといっても、スイスドイツ語圏のバーゼル出身者、ヤーコプ・ブルクハルト（1818-97）の『イタリア・ルネサンスの文化』（*Die Cultur der Renaissance in Italien*）初版が1860年に出た時代であるということでしょう。これは同じく彼の『チチェローネ』（*Cicerone* 1855）とともに、ルネサンス・ブームを引き起こすことになります。ドイツ語圏ではゴットフリート・ゼンパー（1803-79）の『様式論』（*Der Stil*）が『イタリア・ルネサンスの文化』と同年に出版されたのも、興味深いところです。ネオ・ルネサンス様式、古典主義様式の建築はこれらの歴史家と建築家の理論に支援されて展開され、都市計画にもこの建築様式が反映されました[1]。

そして彼らの生と著述活動、それらはイタリア統一運動、リソルジメントの時代と重なっています。たとえば1848年春までブルクハルトは46年に次いで２度目のローマ滞在中でした。これが53年刊行の『コンスタンティヌス大帝の時代』（*Die Zeit Constantins des Großen*）を始め、先の両著作に繋がることになります[2]。イタリア統一宣言が行なわれたのは、1861年３月17日のことであり、本国では、2011年に150周年記念の祝典が華やかに行なわれました。

誕生したイタリア王国は最初トリーノを首都にし、ローマに移るまで65年から５年間はフィレンツェに都がありました[3]。フィレンツェに行くと、ここが一国の都だったという実感はあまり湧いてこないでしょうが、ミケランジェロ広場（il piazzale Michelangelo）に立つと、ジュゼッペ・ポッジ（1811-1901）の都市改造を偲ぶことになるでしょう。ある時、フィレンツェ人の友が中世来の市壁撤去とウィーンのリングシュトラーセとの関連を話してくれたことはとても印象的でした[4]。フィレンツェはルネサンスの町でメディチ家というのが一般的に浮かんできますが、18世紀以降になると、同家に変わってハプスブルク家が入り、ロレーナ時代が始まります。

---

[1] Monika Steinhauser, <<Wir haben Künstler und keine eigentliche Kunste>>. Gottfried Semper und die Neurenaissance, in *Il Rinascimento nell'Ottocento in Italia e Germania. Die Renaissance im 19. Jahrhundert in Italien und Deutschland,* a cura di/hrsg. von August Buck-Cesare Vasoli, Bologna/Berlin 1989, 203-29. 以下、この書は *Il Rinascimento / Die Renaissance* と略する。

[2] Michele Biscione, *Neo-umanesimo e Rinascimento. L'immagine del Rinascimento nella storia della cultura dell'ottocento,* Roma 1962, 102-03.

[3] Ugo Pesci, *Firenze capitale(1865-1870),* Firenze 1988(ristampa anastatica del 1904).

[4] *Sul lavori per l'ingrandimento di Firenze. Relazione di Giuseppe Poggi (1864-1877),* Firenze 1882. 手元にあるのはジュンティからの復刻版であり、Davis Ottati の序文がついている。元はバルベラから出た。

私のように14世紀から17世紀にかけての時代を研究対象とする者には、この19世紀半ばあたりは、昨日のこととは言いませんが、現在からはそう遠い時代には思えません。私自身、1949年の生まれで、前世紀、20世紀半ばころの生誕となりますが、ヨーロッパ研究者としてこの誕生年を考える際に、関心を持ってきた二人の人物から自分の時代と過去の時代との時間間隔を計ってきました。フィレンツェ・ルネサンスを代表する一人、イル・マニフィコと呼ばれたロレンツォ・デ・メディチ（1449-92）[5]が1449年、そしてフランクフルト・アム・マイン出身のヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ（1749-1832）が1749年の生まれですので、両者間には300年が横たわっています。ゲーテは自分の時代まで近代300年が過ぎ去ったと言いますが[6]、ロレンツォと私の間は500年、ゲーテと私の間は200年です。

ブルクハルトの『イタリア・ルネサンスの文化』やイタリア統一は1949年から考えると100年足らず前のこととなるだけでなく、この世紀、19世紀は実は私にはかなり身近な時代にも感じられます。私の系図上の先祖が西南の役に従軍している一方で、進軍中の西郷隆盛（1828-77）におにぎりを出したことがあると、母方の曾祖母が語ってくれたことは、忘れられない思い出です。1961年に曾祖母は101歳でした。西南の役は1877年、明治10年のことです。小学生だった私は、江戸時代に生まれた人と話をしたことがあるということになります。ベネデット・クローチェ（1866-1952）が言っているように[7]、すべての真の歴史は自叙伝であるというのは、真実のように思われます。幕末・明治維新期はこうして私には決して遠い時代ではなく、この期の中心人物のひとり、1835年に生まれ、1870年に亡くなった薩摩藩家老小松帯刀清廉には少なからぬ関心を抱き、小論を発表してきました[8]。西郷がジュゼッペ・ガリバルディ（1807-82）に、大久保利通（1830-78）がオットー・フォン・ビスマルク（1815-98）に擬えられたのに対し、小松はカミッロ・カヴール（1810-61）に擬せられました。こうして薩摩の三傑は明治期にイタリア統一とドイツ統一の中心人物と比較されることになります。ただ補足しておけば、明治維新期の人物は独伊に限らず、米国のジョージ・ワシントン（1732-1799）やベンジャミン・フランクリン（1706-90）にも擬せられました。因みに小松はカヴールとともにフランクリンのようだとも評されています。

ここで、19世紀文化の一端に触れるために、外国人ながらイタリアの歴史に惹かれた人物に注目して見ましょう。先ずその一人は、アーヘン出身のアルフレート・フォン・ロイモント（1805-87）です。ロイモントはプロイセンの私設秘書としてフィレンツェやローマなどに長らく滞在し、時代を代表するイタリア通になってゆきます。ピエトロ・ヴィッシュー（1779-1863）、ジーノ・カッポーニ（1792-1876）らとは親交を結び、ともに1842年の『イタリア史学

---

[5] 根占献一『ロレンツォ・デ・メディチ ― ルネサンス期フィレンツェ社会における個人の形成』南窓社 1999年、第２版。

[6] 根占「ゲーテとイタリア・ルネサンス ― 特に不死性を巡って」、同上『ルネサンス精神への旅』創文社2009年、145-65頁、所収。

[7] Benedetto Croce, *Il carattere della filosofia moderna,* Bari 1963. Michele Ciliberto, Interpretazioni del Rinascimento, in *Il Rinascimento / Die Renaissance,* 65-91.

[8] 根占「小松帯刀とカヴール ― 1860年代の日伊関係」『日伊文化研究』第26号（1988年）、43-54頁。同上「小松帯刀とその時代 ― 特に「外国交際」の観点から」『学習院女子大学紀要』第11号（2009年）、71-91頁。

紀要』（*Archivio storico italiano*）創刊に関わりました[9]。カッポーニはネオ・グェルフィ主義者として高名な人物です。ロイモントはカトリック教徒として、ネオ・グェルフィ主義者たちと同様にローマ教皇下でのイタリア諸国連合体制を支持し、トリーノのサヴォイア王のもとでのイタリア統一を推進するカヴール外交には敵対しました。フランスやスイスに近い、トリーノ出身のカヴールは、ジュネーヴ生まれのカルヴァン教徒を母に持ち、こちらにプロテスタントの縁者を有していました。

教皇が排除されてイタリア統一がなると、外交官としてのロイモントの立場は弱まりました。この後、旺盛な著述活動が始まります。ロレンツォ・デ・メディチ伝もそのひとつです。大作に『ローマ史』（*Geschichte der Stadt Rom,* Berlin 1867-70, 3 Bde.）があります。この歴史書には1585年の日本からの天正遣欧使節のローマ訪問にも言及があります[10]。『ローマ史』を書くに当たってロイモントが意識した、同時代の歴史家は、『中世ローマ史』（*Geschichte der Stadt Rom im Mittelalter,* 1859-72, 4 Bde.）に関わる大作を著わしつつあったフェルディナント・グレゴロヴィウス（1821-91）でした。グレゴロヴィウスは東プロイセン、ナイデンブルク出身のプロテスタントでしたが、永遠の都ローマにおけるドイツ人最初の、そしてプロテスタント最初の名誉市民となりました。1876年のことです。そして望み通り、ローマで亡くなりました。（ロイモントのほうは故郷で死去しました。）

もう一人は英国出身のジョン・テンプル・リーダー（1810-1903）です。彼の名が今日でも知られているのは、フィレンツェ郊外のヴィンチリアータ城のためでしょう[11]。ネオ・ゴシック様式が一世を風靡した時代でもあり、中世の城を復興させたのでした。同時代の英国では「ゴシック復興」が言われる一方で、イタリア・ルネサンス建築様式もまた流行していました。これは建築に限ったことでなく、ほかの芸術分野でも起こっていました。時代概念としての「中世」が「ルネサンス」概念と密接に関わっているように、様式概念としての「ゴシック」もルネサンス文化の古典主義様式と分離できません[12]。ネオ・ゴシックとネオ・ルネサンスの並存が19世紀文化の特徴でした。

テンプル・リーダーが来伊以前から「ゴシック復興」に心惹かれていたかどうかは目下不明ですが、母国ではウィリアム・グラッドストーン（1809-98）の学友であり、ホイッグ党の若き議会人でした。1840年代初期にフィレンツェに移り住み、骨を埋めることになります。英国にはリソルジメント時代にイタリア人たちが亡命しましたが[13]、逆にこのようにイタリアに来て

---

[9] Ferdinand Siebert, *Alfred von Reumont und Italien. Ein Beitrag zur Geschichte der Geistigen Beziehungen zwischen Deutschland und Italien,* Leipzig 1937.

[10] Alfred von Reumont, *Geschichte der Stadt Rom,* Berlin 1870, Band III, II. Abtheilung, 574.

[11] 根占献一「ジョン・テンプル・リーダーのヴィンチリアータ城」、『三都物語2007。トリーノ　フィレンツェ　ローマ』イル・フィオーレ発行（非売品）、2007年、5-9頁。

[12] Karl Borinski, *Die Weltgeburtsidee in der neueren Zeiten, I. Der Streit um die Renaissance und die Entstehungsgeschichte der historischen Beziehungsbegriffe Renaissance und Mittelalter,* München 1919.

[13] 当時の「イタリア」人の亡命先は海を越えた国に限らない。半島中の外国、ハプスブルク統治（ロレーナ）のフィレンツェに亡命した一人に、テンプル・リーダーの同時代人の歴史家パスクワーレ・ヴィッラーリ（1827-1917）がいる。ヴィッラーリのサヴォナローラやマキャヴェッリの伝記は、ルネサンス概念上、重要である。Fulvio Tessitore, L'idea di Rinascimento nella cultura idealistica italiana tra Ottocento e Novecento in Il *Rinascimento/Die Renaissance,* 171-202; 185-89.

長年住み続けた英国人もいました。テンプル・リーダーは当地の出版社バルベラから、昔の英国出身者たち、フィレンツェ共和国の傭兵隊長となったジョン・ホークウッド（1320-94）やメディチ大公に仕えた、地図製作者で探検家ジョン・ダッドリー（1574-1649）の伝を出します[14]。ロイモントやグレゴロヴィウスのように、これらは狭義のルネサンス時代、クワトロチェント（1400年代）自体を対象にしたとは言い難く、その前後の時代が対象と言えるかもしれませんが、15世紀を挟む前後の時代をどう見るかにヒントを与えてくれます。

ルネサンス（リナシメント）— その概念をめぐって

最初に申し上げたように、ドイツ語圏の知識人がイタリアの歴史、古代ローマやルネサンスなどの文化に深い関心を寄せたことはよく知られています。先述のゼンパーは晩年、ウィーンのリンクシュトラーセをギリシャのアゴラでなく、ローマのトラヤヌス・フォルム（フォロ・トライアノ）として構想しました[15]。この実現には困難なものがあり、1879年ローマで彼は亡くなりました。実地面だけでなく著述でも、ブルクハルトやロイモント、グレゴロヴィウスらと同様に、数多くの北方の学者や芸術家が研鑽を積んで多くの分野で業績を挙げ、それが今日、古典的研究や作品として高い評価が与えられていることは改めて強調するまでもありません。これはなにも19世紀に限らず、その前後、18世紀と20世紀でも同様です。20世紀についてはこのあとお話しすることになるヒューマニズム（人文主義）、ヒューマニズム論で納得していただけるでしょう。

18世紀からは、ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン（1717-68）一人で充分でしょう。それは19世紀の文化史家カール・ユスティ（1832-1912）の名著『ヴィンケルマンとその同時代人』（初版1866-72年、全２巻［第２巻は一部、二部に分かれる］。全３巻［1956年第５版］）が教えてくれます。ユスティは決してイタリア文化・美術研究一筋ではありませんでしたが[16]、この大著では、ローマの旧跡に立つことで画期的な歴史意識が生まれることを、中世フィレンツェのジョヴァンニ・ヴィッラーリ（1276-1348）、ルネサンスのペトラルカ（1304-74）などイタリア半島出身者のほかに、同時代のエドワード・ギボン（1737-1794）を挙げて叙述し、ヴィンケルマンの意義を説いています[17]。ヴィンケルマンはここローマでは特に枢機卿アレッサンドロ・アルバーニ（1692-1779）の恩顧を受けました[18]。現地の語学修得に努力し、数々のイタリアの詩人や文学者に親しみました[19]。北方の異郷出身者ヴィンケルマンには、「シ（はい）が響く美し

---

[14] *In memoria del Commendatore Giovanni Temple Leader 7 Maggio 1810-1 Marzo 1903,* Firenze 1903.

[15] Steinhauser, *op.cit.,* 215.

[16] Carl Justi, *Winckelmann und seine Zeitgenossen,* 3 Bde, Köln 1956. この第１巻に、Wilhelm Waetzoldt, Carl Justi, XXI-XXXVI が所収され、スペイン美術研究もまた彼の関心事であったことが明らかである。

[17] Justi, *Winckelmann,* I, 195. *Ibid*.,II, 177. *Ibid*.,III, 92.

[18] Gustavo Brigante Colonna, *Porpolati e artisti nella Roma del Settecento*. *Albani-Winckelmann-Kaufmann-Goethe,* Roma n.d.

[19] Horst Rüdiger, *Winckelmann und Italien*. *Sprache-Dichtung-Menschen,* Köln 1956. ホルスト・リュディガー（1908-84）の主著 *Wesen und Wandelung des Humanismus*. Zweite , verbesserte Auflage, Hildesheim 1966, 156-91で同じく

国」（Il bel Paese là dove il SI suona）南国イタリア、と感じられたことは、私たちにも共感できないでしょうか。

ヴィンケルマンは私たちがルネサンス芸術と呼ぶものに実際に触れて、美術史家としての鑑識眼を養っていますが、まだルネサンス概念には到達できる世紀には生きていませんでした。この点で良く引用されるのは、オノレ・ドゥ・バルザック（1799-1850）の短編小説『ソーの舞踏会』（*Le bal des Sceaux*）の一節です。「彼女はイタリアとフランドルの、中世あるいはルネサンスについて易々と推論しました（Elle raisonnait facilement sur la peinture italienne et flamande, sur le Moyen Âge ou la Renaissance.）」[20]。1830年のことです。このようなルネサンス概念の歴史に関しては古典的研究書があり[21]、ここではこれらに譲り、あまり知られていないことを述べてみましょう。

歴史の世紀と言われる19世紀で名を落とすことができない歴史家といえば、レオポルト・フォン・ランケ（1795-1886）でしょう。ランケもジローラモ・サヴォナローラ（1452-98）やイタリアの詩、文化に関わる論文などでルネサンス文化の特徴は指摘していますが、時代概念としてのルネサンスを用いてはいません。これは、彼がルター教徒として本国ドイツの宗教改革に時代的力点を置いたこと、近世の政治的強国の仲間に数えられない同時代のイタリア文化の様態が、政治史家として一時代を画するほどの芸術的意義と映じなかったことに起因しているのでしょう[22]。

ルネサンス概念の欠如はなにも19世紀ドイツのランケに限りません。リソルジメント時代の同世紀に、イタリアの知識人の間にもこの概念が欠如していました。そしてルネサンスに相当するイタリア語はリナシメント（rinascimento）ですが、この用語よりもリソルジメント（risorgimento）が一般的に使われてもいました。そもそもリソルジメントも復活、復興の意味で、元来はリナシメントの意味と変わりません。啓蒙主義時代のイエズス会士でヴォルテールを賛美する文学者、サヴェリオ・ベッティネッリ（1718-1808）が『紀元一千年後の学術、芸術、習俗におけるイタリア・リソルジメント』（*Del Risorgimento d'Italia negli studi, nelle arti e nei costumi dopo il Mille*）を発表したのは、1775年のことでした[23]。

ネオ・グェルフィ主義者として著名なチェーザレ・バルボ（1789-1853）も、『イタリア史梗概』（*Sommario della storia d'Italia,* Firenze, 1846）で、ベッティネッリ同様、紀元一千年後の母国の歴史に注目し、都市における自由の発展を説きますが、それが自立に繋がらなかったことを強調します。独立の欠如、代議制の欠如などをその特徴とします。ただ文化的には15世紀

ヴィンケルマンを扱うが、フランス、イタリアの文化への対峙やドイツの古代ギリシャ文化との特別な関係が力説される。なおこの版は Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Hamburg 1937である。

[20] Adam Wandruszka, Der internationale Renaissancismus, in *Il Rinascimento / Die Renaissance,* 37-43; 40.

[21] 根占『フィレンツェ共和国のヒューマニスト ― イタリア・ルネサンス研究』創文社、2005年、13頁とその関連注参照。

[22] Notker Hammerstein, Leopold von Ranke und die Renaissance, in *Il Rinascimento / Die Renaissance,* 45-64.

[23] Francesca Maria Crasta, Immagini del Rinascimento nel Settecento italiano, in *Rinascimento mito e concetto,* a cura di Renzo Ragghianti e Alessandro Savorelli, Pisa 2005, 65-108; 103-07. 関連頁に挙がるベッティネッリ文献参照。

にその頂点に達し、16世紀のイタリアの危機と衰退の開始と好対照をなすとします[24]。打って変わって15世紀と16世紀をこのように対照させる歴史観は近年でも見られ、クローチェもそのひとりです。そしてこれは長く尾を引き、16世紀の問題は19世紀に持ち込まれます。彼の論文「1500年代のイタリア的危機およびリナシメントとリソルジメントとの関係」(La crisi italiana del Cinquecento e il legame del Rinascimento col Risorgimento, *La Critica,* novembre 1939)がそれです[25]。

なお、ルネサンス、リナシメントをリソルジメントと呼ぶのは19世紀後半に入っても見られ、ジョシィア・インヴェルニッツィ（ジョズエ・カルドッチ）作の『リソルジメント第１部。15世紀』(*Il Risorgimento*. *Parte prima: il secolo XV*）という書が挙げられます。第２部は当然16世紀を扱い、これもリソルジメントと呼ばれるようになることを示しています。出版年は1878年ですが、挙げられている文献などから執筆年代は70年代初めから前半と見られ、たとえばグレゴロヴィウスの『ルクレツィア・ボルジャ』(*Lucrezia Borgia*)(1480-1519）が挙がっています[26]。この書はドイツ語版もイタリア語版も74年に出ています。ブルクハルトの『イタリア・ルネサンスの文化』は示されていません。このイタリア語訳が出たのは1876年のことでした。

ところで、『イタリア・ルネサンスの文化』初版に先立つこと一年前、1859年に、ヒューマニズム（フマニスムス）研究では極めて意義深い著書が出ていました。ケーニヒスベルク生まれのゲオルク・フォークト（1827-1891）による『古典古代の再生すなわちフマニスムスの最初の世紀』(*Die Wiederbelebung des classischen Alterthums oder das erste Jahrhundert des Humanismus,* Berlin）がそれです。これはヒューマニズム概念と時代とを結び付けた点で極めて重要な研究書です。ルネサンスという時代概念とある意味で今日も交換概念(Wechselbegriff)となっているのはこのためでしょう。後述するように、フマニスムスという用語は半世紀ほど前に生まれていたのですが、これで決定的な概念となりました。これは、1836年にドロイゼンが「ヘレニスムス」(Hellenismus）に時代概念を与えたことに相当する出来事でした[27]。

インヴェルニッツィに戻ると、彼はフォークトを文献として列挙していません。やがてフォークトの書は増補第２版が出た（1880-81年）後、ブルクハルトの先の書を翻訳したディエゴ・ヴァルブーザが今度はこのイタリア語訳をフィレンツェのサンソーニから出すことになります（1888-89年)。翻訳書の題名は『古典古代のリソルジメントすなわちウマネージモの最初の世紀』(*Il risorgimento dell'Antichità classica ovvero il primo secolo dell'umanesimo*)でした。更にイタリア語版には1897年、ジュゼッペ・ジッペルによりこの２巻本を補う第３巻（1897年）がつき、フォークトの書の完璧化が図られました。私はここで、リソルジメントという用語が変わらず用いられていることに加えて、フマニスムス、ヒューマニズムに相当するイタリア語

---

[24] Ciliberto, *op.cit*., 72-3. レオ10世時代を盛期の頂点と見るので、世紀の区分は必ずしも厳密ではない。Cfr. Crasta, *op.cit*.,104. ベッティネッリは16世紀に中世の文化や歴史が驚くべき成果に達するという。

[25] Carlo Dionisotti, Rinascimento e Risorgimento, in *Il Rinascimento / Die Renaissance,* 157-69; 157.

[26] *Ibid*., 162.

[27] Walter Rüegg, *Cicero und der Humanismus*. *Formale Untersuchungen über Petrarca und Erasmus,* Zürich 1946, 4.

のウマネージモが使われ出していること、また肝心のフォークトの著書が最後に地理書を扱い[28]、ヨーロッパのルネサンスが拡大していく様子を示唆していることを指摘しておきたいと思います。

元来ドイツ語による出版物がこうしてイタリア語訳で出ることには、イタリア半島の人々がドイツの文学や思想、歴史研究に魅惑されたためでもありました。したがってこの時代、19世紀の場合、アルプスを挟んで北から南への眼差しだけでなく、南から北への眼差しも忘れてはいけないことになるでしょう。彼らは、カント（1724-1804）とこれに続く世代、ヘルダー（1744-1803）、ゲーテ、シラー（1759-1804）、そしてアウグスト・シュレーゲル（1767-1845）やその弟フリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829）、ヘーゲル（1770-1831）、シェリング（1775-1854）、さらにニーブール（1776-1831）やサヴィニー（1779-1861）などに目を見張りました。特に哲学思想の面ではカント、ヘーゲルの影響は絶大で、観念論哲学に学ぶところが多々あったベルトランド・スパヴェンタ（1817-83）の名を逸することはできないでしょう。スパヴェンタは若い頃、古典語は別にして英語とともにドイツ語を学んだために、原典を読み、理解する力がありました。このため北方思想に精通し、イタリアとドイツの思想交流に注目した書を編んでいます。また兄シルヴィオ同様、リソルジメント期を代表する愛国者としても知られています[29]。

1820年に、ある人（エジディオ・ディ・ヴェーロ）は既出のジーノ・カッポーニにあてて、「あなたは今フランクフルトにいて、何と幸せなのでしょう。……ドイツの素晴らしい著書、ヘルダー、ゲーテ、レッシング、ミュラー、アイヒホルン、ヘーレンなどを購入しています。私もまたこれらを幸あるエトルリアにて楽しむことができるように、と」[30]願っていると書きました。このような例は幾つも挙げることができるでしょうし、私はこの書簡を知った時、これより300年遡ったルネサンス時代に、エラスムス（1466-1536）がロイヒリン（1455-1522）宛に書いた書簡（1516年９月29日、アントウェルペン）がたちどころに思い起こされました。「あなたはどうして敢えて不幸について語ろうとするのですか。アンジェロ・ポリツィアーノ、エルモラオ・バルバロ、それにピーコ・デッラ・ミランドラが活躍したあの驚くべき時代にイタリアを訪問する幸運を摑んだあなたが。[31]」彼ら３人は1493年、94年に相次いで亡くなりました。ヒューマニスト（人文主義者）のポリツィアーノ、バルバロは40歳になったばかりであり、哲学者ピーコは31歳でした。

---

[28] Georg Voigt, *Die Wiederbelebung des classischen Alterthums oder das erste Jahrhundert des Humanismus,* Berlin 1960, II, 505-10. Id., *Il risogimento dell'Antichità classica ovvero il primo secolo dell'umanesimo,* Firenze 1968, II, 494-98. フランチェスコ・フィオレンティーノ（1834-1884）はポンポナッツィ、ブルーノ、テレージオらの哲学研究で著名だが、彼の書名にもリソルジメントの呼称が見られる。またフィオレンティーノは同義語のリナシェンツァ（rinascenza）も使う。Fulvio Tessitore, *op.cit.,* 177-185. なおイタリアにおける代表的なルネサンス学術誌は *Rinascimento* であるが、戦前は *Rinascita* と呼ばれていた。

[29] Tessitore, *ibid.,* 171-77.

[30] Siebert, *op.cit.,* 12-3. ジーベルトはさらに他に数例挙げている。

[31] Des. Erasmi Roterodami *Opus Epistolarum,* ed. P. S. Allen, 2: 350 (no. 471).

ヒューマニズム ― フマニタスとフマニタス研究

以上のように、この19世紀に生まれたのが、ヒューマニズム、フマニスムスという用語でした。ポリツィアーノやエラスムスのルネサンスの時代にはこの術語は存在せず、ある意味で時代概念としてのルネサンスとともに新概念であり、ドイツ文化に起源があると言ってもよいでしょう。従って時代の証言として、『イタリアにおけるルネサンス』（*Renaissance in Italy,* 7 vols. 1875-86）やミケランジェロの伝記、ベンヴェヌート・チェッリーニの自伝翻訳で著名な文学者ジョン・アディントン・シモンズ（1840-93）は19世紀後半に、ヒューマニズムがドイツ的響きを有し、モダンであると言っている[32]のは全く正しいのです。なぜなら、18世紀後半のフランスにユマニスムが現われている例が知られていますが、この講演で考えているヒューマニズムと同義語であるとは言い難く、「人類愛」の意味合いが強いからですし、また、19世紀初めにゲーテがフマニスムスという表現を用いていますが、やはり「人道主義」の意味合いにおいてだからです[33]。

だが、このゲーテの例とほぼ同じころに同じくドイツで、フマニスムス、ヒューマニズムの用語が登場してくるのは、大いに注目されます。それは、教育者フリートリヒ・イマーヌエル・ニートハンマー（1766-1848）が『当世の教育教授論における博愛主義的教育とフマニスムス（ヒューマニズム）の対立』（*Der Streit des Philanthropinismus und Humanismus in der Theorie des Erziehungs=Unterrichts unserer Zeit,* Jena 1808）で用い、意味をもたせたことにきっかけがあります[34]。

ルネサンス期にあった言葉は、ヒューマニスト、フマニスタで15世紀末に初めて出てきます。当時の大学生が用いたスラングであり、古典学教師を指します。ヒューマニストそのものは「フマニタス研究」（studia humanitatis）という成句と関わるでしょうし、「フマニタス研究」がルネサンスではヒューマニズムに相当する語ということになります。「フマニタス研究」とは私たちに馴染みのある言葉で言えば、ヒューマニティの複数形ヒューマニティーズに相当し、人文学と呼んでいるものです。ドイツ語ではフマニオーラ（Humaniora）でしょうか。ヒューマニティはドイツ語でフマニテートとなり、この言葉が入った書物としてヘルダーの『フマニテート促進のための書簡』（Briefe zur Beförderung der Humanität, 1793-97）が直ちに想起されます。このなかで彼は、理想的な三美神とムーサイたち庭（der Garten der Grazien und Musen）に集う古代から現代までの人物を列挙しています。大昔のホメーロスから当代のフランクリンに至る、一連の人々に交じってエラスムスも登場します。ヨーロッパにおけるフマニテートの芽吹きを期待できるからです[35]。

---

[32] 根占『フィレンツェ共和国のヒューマニスト』、34頁。

[33] 同書、33-4頁。

[34] 同書、36頁。*Frierich Immanuel Niethammer: Philanthropinismus - Humanismus*. Texte zur Schulreform bearbeitet von Werner Hillebrecht, Winheim/Berlin/Basel, 1968.

[35] Werner Kaegi, Erasmus in Achtzehnten Jahrhundert, in *Gedenkschrift zum 400. Todestage des Erasmus von Rotterdam,* hrsg. von der historischen und Antiquarischen Gesellschaft zu Basel, Basel 1936, 205-27; 226.

フマニテート、人間性の発展を教化、養育、クルトゥアと結び付けたヘルダーは、ドイツにおけるこの新たなヒューマニズムの時代に深く関わっている一人と目されます。ニートハンマーの教育観は、このような時代的環境の中で見ておかなくてはならないでしょう。ギュムナージウム教育から大学を通した専門教育システムまで、個我の自己形成と国家と国民（Nation）に対する責任確立が意図されてゆきます。ドイツ的マンダリーン（Mandarin）やエリート層の教養市民がこうして誕生します。この時代の研究者たちは、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767 - 1835）らの文化活動を「新フマニスムス」と称することが一般的で、これを教育と結び付けます。それはまた「新ギリシャ主義（ノイグリーヘントゥーム）』だったかもしれません。フンボルトがライプツィヒのゴットフリート・ヘルマン（1772-1848）に、ライプツィヒ諸国民の戦い（Völkerschlacht）に関して「諸帝国は滅び、良き詩行一行は永久（とわ）に生きる」と言い放った時は、アイスキュロスの『アガメムノン』を翻訳中のことでありました[36]。このことでは、古典文献学者ルドルフ・プファイファー（1889-1979）の優れた論文のひとつ、「フマニスト（ヒューマニスト）ヴィルヘルム・フォン・フンボルト」には教示され、啓発されます。

さて、フマニテートの初出例は同じくルネサンスに、16世紀初めにあることが分かっていますが、これはある意味でラテン語をそのままドイツ語の音にしたといえるでしょう。ドイツ語らしさとしては、18世紀にこれを Menschheit（人間［であること］）または Menschlichkeit（［思いやりなどの］人間らしさ）と解釈し、用いる知識人によって多様であり、また意味内容が違う歴史がありました。これはフマニタスというラテン語が、当然のことながら、彼らには外来語であったためで、これをどう捉えるかが、思想家や文学者によって違ったためでした[37]。遡れば、このラテン語もまた古代ローマ人によって、ギリシャ語のパイデイアを捉えるために作られた言葉でありました。パイデイアは、教育、教養を意味し、パイス、子どもという言葉から来ています。この概念でギリシャ人は植物・動物の自然的成長を表わす「トロペー」と、人の人為的成長とを区分したと言われています[38]。

一ギリシャ語を一ラテン語で表わす時、元の意味を充分には必ずしも捉え得ないというだけでなく、訳語とて原語になかった意味が加わる可能性も否定できません。これは、それがフマニタスとなった時、ギリシャ人とローマ人では「人間」の見方が違っていたことが問題でした。「人間」を超越者、神と比較して考えるのか、それとも獣と関連させて考えているのかでは、大きく意味合いが異なってくるでしょう。そしてさらにキリスト教の時代になれば、その人間観には新たな要素が加わることになるでしょうし、現代では現代を背景に新たな問題と解釈をもたらすでしょう[39]。

---

[36] Rudolf Pfeiffer, *Ausgewählte Schriften.Aufsätze und Voträge zur griechischen Dichtung und zum Humanismus,* München 1960, 256-68; 262.

[37] Edna Purdie, Some Renderings of *Humanitas* in German in the Eighteenth Century, in *Fritz Saxl. A Volume for Memorial Essays from his Friends in England,* edited by D. J. Gordon, London 1957, 339-58.

[38] ヘルダーは人の成長を植物のそれに擬えているが。*Ibid*. 347.

[39] Andrea Orsucci, Storie di parole. Controversie intorno al termine *humanitas* nella prima metà del Novecento (1907-1947), in *Rinascimento mito e concetto,* 255-90.

フマニタスが多義的で多用に上るのに対し、「フマニタス研究」という言い回しはある程度限定的で、意味内容に明瞭な点が見られます。古代ローマの共和主義者でカエサルの政敵キケロに見られるのですが、面白いことに、その後、長い中世の間に使われることなく、フィレンツェ共和国の著名な書記官長 ― フィレンツェ共和国ではこの時代、ヒューマニストが書記官長に選抜されることが一般的でした ― の両名、コルッチョ・サルターティ（1331-1406）とレオナルド・ブルーニ（1370頃－1444）が14世紀後半から使い始め、一般化してゆきます。そして15世紀半ば辺りには、それは文法・レトリック・歴史学・詩・道徳哲学のこれらの分野を指すことになります。「フマニタス研究」はドイツでも大学の講義告知に直ちに反映されます[40]。

この線はほぼ変わらず、時代が下った16世紀末のイエズス会学事規定（*Ratio atque institutio studiorum Societatis Iesu*）の一節にも現われます。「フマニタス研究、即ち文法、歴史、詩、そしてレトリックの研究」とあり[41]、哲学の一分野が欠けているだけです。イエズス会はルネサンス・ヒューマニズムを熱心に教育に活かした修道会として知られています。これは海を越えて、新旧の世界に広がり、日本にもまたヒューマニズム教育が導入されました。これはキケロやウェルギリウスなど古典に基づく教育を基本とします。

私は中世とは異なるルネサンスの意義をここに見ています。ルネサンスとは今日、近代初期 ― Early Modern、日本的言い方では近世初期 ― や Neuzeit のルネサンスだけでなく、カロリング・ルネサンスや12世紀ルネサンスが言われ、その独自性を否定的に見る史観があります。これはルネサンスを狭義にラテン語中心の「古典復興」と捉える観点にのみ基づくもので、所謂世界史的視野が欠如しているとしか思われません。私は15，6世紀を中心としたルネサンスが、昔から言われてきた「地理上の発見」、今日的な学術概念では「世界システム論」などと深い関わりがあると見ています。ヒューマニズム教育の拡大もここにあるのです。テンプル・リーダーのところで傭兵隊長や冒険家の名前を出したのも、私のルネサンス観の反映です[42]。

第三フマニスムスと市民的フマニスムス ― 両概念の歴史的背景

ところで、リソルジメント期にイタリアでは必ずしも古典語、ラテン語が重視されていなかった歴史事情があるように思われます。そのことが「古典復興」にこの地の学者や知識人たちが注目しなかった理由があり、フォークトの労作はこの点でも新奇だったのです。イタリア語はドイツ語と違い、ラテン語に深い関わりがある言語であることは申すまでもありません。そのため古典語と俗語の関係如何がイタリア・ルネサンス以来常に言われ、俗語の発展を近代

---

[40] 根占『フィレンツェ共和国のヒューマニスト』、34頁。同上『共和国のプラトン的世界 ― イタリア・ルネサンス研究（続）』創文社、2005年、33-37頁。同上「フマニタス研究とアグリコラ」、『ルネサンス精神への旅 ―ジョアッキーノ・ダ・フィオーレからカッシーラーまで』創文社、54-57頁所収。

[41] 根占「フマニタス研究の古典精神と教育 ― イエズス会系学校の誕生頃まで」、『教育の社会史 ― ヨーロッパ中・近世』浅野啓子・佐久間弘展編、知泉書館、2006年、125-48頁。

[42] 根占『東西ルネサンスの邂逅 ― 南蛮と禰寝氏の歴史的世界を求めて』東信堂、1998年。

の展開と捉える観点がありました。サルターティやブルーニと違い、ダンテやペトラルカ、ボッカッチョがルネサンスの著名人となっているのは面白いところです。彼らは俗語で執筆した作品が代表作であるために高く評価されているのです。19世紀のイタリア統一に当たってはイタリア語が北から南へ貫徹される国語となるのであり、ローマ・カトリック教会のラテン語ではなかったのです。

このようにイタリアの事情を話した訳は、ドイツのヒューマニズム、フマニスムスを見て行く場合、ドイツにはドイツの事情があったと考えるからです。ドイツでは「新フマニスムス」に続いて「第三フマニスムス」も出てきます。このフマニスムスには、主著『パイデイア』で知られる古典文献学者ヴェルナー・イェーガー（1888-1961）が関わりますが、もう一人、学者としては哲学者エドゥアルト・シュプランガー（1882-1963）も挙げておくべきでしょう。芸術家ではシュテファン・ゲオルゲ（1868-1933）やフーゴー・フォン・ホフマンスタール（1874-1929）が名を連ねます。抒情詩人たちにとり、ルネサンスは道徳を超越した天才が活躍した時代でした。ドイツ・ヒューマニズムの特色はギリシャ主義に惹かれてゆく ― ヴィンケルマンが特にそのような流れを作ったのでしょう ― ところがあり、それは場合によってはイタリアに、あるいはローマ・ラテン文化に対抗するためでした[43]。

他方で、同時代のヒューマニズム観として「市民的フマニスムス」が言われるのが、これまたドイツの事情です。私はこの「市民的フマニスムス」にルネサンス・プラトン主義とともに関心があり、長年の研究をまとめて、『フィレンツェ共和国のヒューマニスト』と『共和国のプラトン的世界』の一続きの著作にしました。総括して見て、15世紀のフィレンツェ共和国に関わる「市民的フマニスムス」論が、ゲオルゲとホフマンスタール、イェーガーの「第三フマニスムス」論となにか繋がりがあるのではないか、と気付いたのは、カイ・シラーの『逆境の知識世界 ― 20世紀におけるフマニスムスの指導像』を読み、見えなかった学者の人間関係が明らかになった時でした[44]。シラーはこの著書で、特に二人のユダヤ系ドイツ人、中世史家エルンスト・カントーロヴィッチ（1895-1963）とルネサンス史家ハンス・バロン（1900-88）に的を絞って、彼らの思想世界を明らかにします。両者とも「第三フマニスムス」の中心人物から影響を受けましたが、特に、カントーロヴィッチはゲオルゲから、バロンはイェーガーからということになります。

ドイツに同時に現われた両フマニスムスをどう見るべきなのでしょうか。バロンはイェーガーの古典文献学の解釈学的方法 ― アリストテレス哲学の思想的発展を明らかにしたやり方 ― をブルーニの著作に応用したと言えるかもしれませんが、プラトン思想をヴァイマル共和国の指導的規範とする、イェーガーの「第三フマニスムス」論[45]に近いとは言えないでしょう。第

---

[43] Rüdiger, *Wesen und Wandelung,* 255-97. Achim Aurnhammer, <<Zur Zeit der grosen Maler>>. Die Renaissancismus im Frühwerk Hugo von Hofmannsthals, in *Il Rinascimento / Die Renaissance,* 231-60.

[44] Kay Schiller, *Gelehrte Gegenwelten. Über humanistische Leitbilder im 20. Jahrhundert,* Frankfurt am Main, 2000. 根占『共和国のプラトン的世界』194-95頁。

[45] Werner Jaeger, *Humanistische Reden und Vorträge*. Zweite erweiterte Auflage, Berlin 1960.

三という数字がまた時代的に不吉です。「第三フマニスムス」は明らかに「新フマニスムス」を第二 ― ルネサンス・ヒューマニズムを第一 ― として意識し、これを受け継いでいます。これに対し、バロンは確かにフンボルトの教育観で育ったベルリン市民 ― 父は衛生顧問（Sanittäsrat）― であり、この点では同世代の非ユダヤ系エリートと変わりがないでしょうが、彼のフマニスムスは、直接、過去の歴史、フィレンツェの初期ルネサンス史を生の全体において現今から解釈し直し、「市民的」という限定をつけているのです。

19世紀後半、ドイツでは産業資本主義の発達が目覚ましく、自然科学のため理数系のギュムナージウム（Realgymnasium）の充実が一段と求められました。他方で、ヴィルヘルム・ディルタイ（1833-1911）の解釈学が精神科学の世界に新視点をもたらしました[46]。ランケのように因果関係の叙述的解明に供される事実がいかにあったかという素朴な歴史主義を越えて、歴史家、歴史研究者がいかなる存在であり、その彼の認識が如何に行なわれるのかが問われる、生の哲学を提示します。「歴史的理性批判」（Kritik der historischen Vernunft）はカント哲学への回答でもあり、その意義は1920年代に学究世界に進もうとしているバロン世代には重大でした。

そのようなバロンはヴァイマル共和国下で、イェーガーのほか、近代史家フリートリヒ・マイネッケ（1862-1954）、宗教学者エルンスト・トレルチ（1865-1923）、そして中世史家ヴァルター・ゲッツ（1867-1958）らに学びました。バロンの大学教授資格論文（Habilitationsschrift. 1928年５月15日提出）は、『アレッツォ出身のレオナルド･ブルーニと1400年代フィレンツェの市民的フマニスムス』（*Leonardo Bruni Aretino und der florentiner Bürgerhumanismus des Quattrocento*）でした[47]。論題中の「市民的フマニスムス」論にいち早く注目した歴史家は、パウル・ヨアヒムゼン（ヨアヒムゾーン。1867-1930）でした。論文「フマニスムスとドイツ精神の発展」の中で、彼はフィレンツェのみが市民精神の形成にフマニスムスが関わったといい、注でバロン の「市民的フマニスムス」（Bürgerhumanismus）を文献とともに紹介し、さらに、同じ志向のカール・ブランディ（1868-1946）の文献を挙げています[48]。これはヨアヒムゼンが死去する一年前の1929年に行なわれた講演に基づくもので、活字化された時にはもうすでに鬼籍の人となっていました。

ヒットラーが政権を掌握すると、バロンの輝かしい学究活動は一変します。教授職をイタリア、英国、米国に捜すのは容易でなく、結局は成功しませんでした。そのような中で、1955年

---

[46] Reinhardt Brandt, Die italienische Renaissance in der Geschichtsauffassung Diltheys und seiner Vorläufer, in *Il Rinascimento / Die Renaissance,* 133-55. ブラントはこの論文の最初のほうで、ルネサンス・ヒューマニズムの堅実な研究者として Ludwig Bertalot と Agostino Sottile を挙げている。両者が主に研究したヒューマニストは、前者がブルーニ、後者がルドルフ・アグリコラであった。

[47] Schiller, *op.cit.,* 104-05.

[48] Paul Joachimsen, Der Humanismus und die Entwicklung des deutschen Geistes, in *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschft und Geistesgeschichte,* Band III, Heft3, 1930, 419-80; 428. 挙がっているのは、Baron, *Lionardo Bruni Aretino. Humanistische-philosophische Schriften,* Leipzig1928 と Karl Brandi, *Das Werden der Renaissance. Rede*, Göttingen 1908.　オルスッチはバロンのルネサンス観に先行する学者としてブランディとヨアヒムゼンを挙げている。オルスッチはまた、 ブランディの次の書に注目し、版による相違を指摘している。Orsucci, *op.cit.,* 272-77.　Brandi, *Die Renaissance in Florenz und Rom,* Leipzig 1900. ここでは初版を掲げた。

に初版、66年に改訂再版として出たのが、主著『初期イタリア・ルネサンスの危機 ― 古典主義と専制政治との時代における市民的ヒューマニズムと共和主義的自由』（*The Crisis of the Early Italian Renaissance.Civic Humanism and Republican Liberty in an Age of Classicism and Tyranny,* Princeton 1966[1955]）でした。その一節に「古代人のフマニタスへの愛なしに、またそれによって教育される覚悟なしには、ヒューマニズム（Humanism）などありえない。ギリシャやローマの市民の活動的・政治的生活の価値と理念に感ずる心なしに、市民的ヒューマニズムは生まれ得なかったろう」[49]とあります。市民的ヒューマニズムは、アリストテレスの「ポリス的生きもの」を受け継ぐラテン的伝統と共和主義思想とに生の活路を見出します。反カエサルの共和主義者キケロが祖国の模範であり、共和政的自由を謳歌し、これを実現する国家として15世紀前半のフィレンツェ共和国が評価されます。この時、書記官長職にあったのが、先述のブルーニで、彼はそのイデオローグでした。

バロンのブルーニ解釈は、公職の身にあって、ギリシャ語文献の翻訳などの学術的活動を行なう点で、フンボルトと変わりがありませんが、バロンのキケロ理解は、『ローマ史』（*Römische Geschichte*）のテオドア・モムゼン（1817-1903）とは大きく異なっていると言えるでしょう。モムゼンは人間的にもキケロを厳しく批判しただけでなく、ローマの発展を帝国成立に見るのです。フランスの同時代の古典文献学者ガストン・ボワシエ（1823-1908）はモムゼンの歴史把握について、ローマの貴族のなかにプロイセンの田舎紳士（les hobereaux de la Prusse）を追求し、カエサルのなかに力強い手のみがドイツ（l' Allemagne）に統一を与える、そのような人気ある独裁者を前もって迎えるのだ（*Cicéron et ses amis,* 1865）、と書きました。1865年のことです[50]。

キケロをどう理解するかにもかかる、このようなフィレンツェ・ルネサンスが「市民的フマニスムス」論として、学術的に同時代の日本で受容された形跡はありません。戦前のある時期、ドイツ学界を介したルネサンス論が東北帝国大学で大類伸（1884-1975）博士の下で盛んであったものの、バロン説は管見の限り紹介されていません。先のブランディはある程度邦語世界で知られていた歴史家でしたが、ヨアヒムゼンやバロン同様の歴史観に気付いた研究者はいませんでした。これは戦後も基本的に変わりませんでした。日本の、特にドイツ中世史家たちは近代市民社会論に関心を抱きながら、イタリア・ルネサンスの都市に先入見があり、ブルーニの強調する「市民社会」（civilis societas）[51]などを顧慮することはありませんでした。これは社会経済史に留まらず、文化史の範囲の問題でもあっただけに、一層理解が困難でした。

ひょっとしたら、今回のフマニスト像とフマニスムス観は、今なお日本では受け入れられているとは言い難いでしょう。そもそも、日本文化がギリシャ・ローマの古典古代文化に繋がらないため、ヒューマニズムをヨーロッパの単なる学術問題、ヒューマニストを註釈に力を入れ

---

[49] 根占『フィレンツェ共和国のヒューマニスト』77-8頁。
[50] Rüegg, *op.cit.,* VIII.
[51] 根占、前掲書、82、107頁。

る静態的な学者とし、ヒューマニズムがあるいはヒューマニストが市民社会の現実的力足りえることに思い至らない、已むを得ない事情があるのかもしれません。他方で、日本語としてヒューマニズムが使われていることも歴史理解を妨げているのかもしれません。プラトン主義、プラトニズムでは起こり得ないでしょう。ヒューマニズム、フマニスムスは、ブルーニやフンボルトが用いている概念ではありません。彼らより後の世の者が過去の文化状況を見て、「ルネサンス」・ヒューマニズムといい、「新」フマニスムスといいますが、「第三フマニスムス」と「市民的フマニスムス」は意識的に同時代人が実際に用い、過去のヒューマニズム、「ルネサンス」・ヒューマニズムと「新」フマニスムスとの関連と継承、展開を言い表わそうとしたものです。

この度のいただいた機会に、ヒューマニズムに関わる歴史を少々明らかにできたのではないか、イタリアとドイツの視点からという副題も余りまちがっていなかったのではないかと思います。拙い説明に最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

Renaissance Humanism and Modern Times — Especially from the Point of View in Italy and in Germany. —

Kenichi NEJIME

Availing myself of the opportunity of my lecture, I explained the origins and development of the idea of Renaissance and Humanism, principally in Italy and Germany of the 19th and 20th centuries.

Semper and Burckhardt wrote the important books about the style and culture of the Renaissance. In those times Italy was seeking for the unity of country called the Risorgimento. Besides these scholars, Reumont, Gregorovius and Temple Leader of the same 19th century individually wrote many books about the history of Rome, the story of the Medici, and Englishmen active in Renaissance Italy.

Interestingly enough, The Risorgimento had the same meaning as the Renaissance. Therefore Bettinelli published *Del Risorgimento d'Italia negli studi, nelle arti e nei costumi dopo il Mille* in 1775. The use of the term Risorgimento continued until the second half of the 19th century. About the middle of this century Voigt published *Die Wiederbelebung des classischen Alterthums oder das erste Jahrhundert des Humanismus*, very important study, that would be translated *Il Risorgimento dell'Antichità classica ovvero il primo secolo dell'Umanesimo* in Italian. And now the age of the Risorgimento, that is to say, the Renaissance signified the times of Humanismus (humanism, humanisme, umanesimo). Half years ago before this publication Niethammer *de facto* coined the term of Humanism related to the classical languages of Greek and Latin. But the Renaissance gave birth to the term of humanist, the teacher of these languages. The term of the Humanism had never existed in the Renaissance when there had been instead the term of *studia humanitatis* (humanities).

In Germany the concept of Humanism was not a little complicated according to its ages. Especially there were two kinds of it in the 20th century, the third (der dritte) Humanismus after both the (first) Renaissance Humanism and the (second) Neuhumanismus at the times of Niethammer, and the Bürgerhumanismus. The latter is more important than the former, because, using the Bürgerhumanismus, Civic Humanism in English, Baron, American historian born in Berlin, emphasized the publican liberty of Florentine citizens against the tyranny of Milan, and gave the great contribution to the political and social interpretation, not cultural, of the Florentine Renaissance in the early years of the 15th century, the *Quattrocento*.